

## 一般演題：第31群

症状コントロール・緩和ケア  
2

### 癌性腹膜炎のイレウス症状のケア～PTEG管理を試みて～

池田一美先生ほか

(佐田厚生会佐田病院)

消化器がんの終末期に、通過障害による嘔気、嘔吐、腹部膨満がみられると、症状緩和のために経鼻胃管が挿入されることが一般的である。しかし留置に伴って顔面や咽頭部の違和感が強く患者さんのQOLが損なわれることが多い。

この問題に対処するため、池田

先生は経皮的経食道胃管挿入術(percutaneous trans-esophageal gastrotubing；PTEG)を積極的に取り入れている。PTEGとは、超音波下に左側頸部を穿刺する新しい食道瘻造設術で、顔面が開放されるため経鼻胃管留置時のような不快感がなく飲水も可能となる。

また、PTEGは在宅での自己管理も可能で、退院時にチューブの着脱や排液の廃棄法などの管理を患者さん・家族に指導したり2週

間の試験外泊を行うなど、丁寧な看護介入をすることでさらにこまかな要望に応じていきたいと池田先生はまとめた。

---

次回は、2007年2月6日(土)～7日(日)に東京にて行われる予定。(取材/瀧本・細川)